

## 第3回 四万十川自然再生事業検討会

### 議事概要

令和6年2月2日（金）

15:00～17:00

中村河川国道事務所 別館2階会議室

1. 開会、2. 事務局挨拶、3. 委員紹介を行う。議題と各委員の意見は下記のとおり。

#### （1）前回の委員指摘事項に対する回答

- ・委員からの意見は特になかった。

#### （2）ツルの里づくりⅡ期整備のモニタリング計画について

- ・中山地区の整備が次の飛来時期までに終わるのであれば、整備後にデコイを設置し、ツルの飛来を積極的に誘致してはいかがか。[谷地森委員]
- ・この地域での鳥インフルエンザの発生をできるだけ早期に把握し、情報の共有化に努めていただきたい。[谷地森委員]
- ・仔稚魚の密度を把握することは難しい。定性的でよいので、対象魚の生息状況を把握できる調査をしっかりと行うほうがよい。[木下委員]
- ・拠点間整備では、緩流域だけでなく、様々な工夫により、速く流れるような場所があるとよい。細流は変化を持たせたものにしていただきたい。[石川妙子委員]

#### （3）アユの瀬づくりに係るモニタリング調査結果と今後の事業展開について

- ・定期的なモニタリング調査では、産卵場面積の把握だけでなく、流下仔魚調査や遡上状況調査を実施して、アユが健全に再生産できていることも確認できるとよい。[關委員（当日は欠席）]
- ・砂分の多い河川では、産卵床の礫間が砂で埋まることにより、産卵床から仔アユの浮出が困難になり、その後の生存に悪影響を与える事例がある。このような状態になっていないかについても、モニタリング調査で確認できるとよい。[關委員（当日は欠席）]
- ・流下仔魚調査を実施することは理想的である。流下後の仔魚調査を20年間実施しており、必要であればいつでも情報提供する。[木下委員]
- ・産卵場面積の近年の増加は、仔魚調査の結果と一致しており、アユの瀬づくりは、少なくとも悪い方向には作用してない。ただし、仔魚量がその後の資源量に必ずしもつながるわけではないことは認識しておく必要がある。[木下委員]
- ・塩水遡上はアユの産卵場の下流端を決定する重要な指標となるため、産卵期である10月から12月の大潮満潮時の調査結果を整理していただきたい。[木下委員]
- ・11k付近から上流側の河畔林の林床は最近ほとんど除草されていないため、出水時に通水阻害となりそうなノイバラやクズが密生する状態に戻りつつあるように見受けられ

る。出水時に河畔林内が攪乱され砂礫河原を広げる想定であるため、上流側の河畔林の林床は状況に応じて除草したほうがよい。[石川慎吾委員]

- ・平成27年に産卵場面積が急増した後、平成28年に急減し、その後増加しているが、この時期は出水による地形変化もなさそうである。今後、産卵場面積が減った際に実施すべき調査の参考となるため、増減につながった違いを確認していただきたい。[岡田会長]

#### (4) スジアオノリ場の再生に係る今後の事業展開について

- ・スジアオノリ場の再生事業については休止する方針が妥当である。四万十川の汽水域にはスジアオノリの胞子が大量に存在しているため、水温が低下した場合は回復していく可能性がある。そのため、モニタリング調査についてはぜひ継続してほしい。[平岡委員(当日は欠席)]
- ・胞子が大量にあるとされているが、胞子の分布の濃淡や密度を経年的にみていくことにより、事業休止の判断材料となる情報が得られる。胞子の水平分布調査を継続的に実施していただきたい。[木下委員]

#### (5) コアマモ場の再生・創出に係る今後の方向性について

- ・移植技術も移植の成否に影響を与えるため、移植作業は移植経験を有する技術者が行い、作業状況についても記録しておくとうよい。[平岡委員(当日は欠席)]
- ・コアマモのDNA分析は種内変異を確認できるような方法、精度で実施する必要がある。四万十川と蛸瀬川の個体のみをするのではなくて、他地域の個体と併せて分析、比較することで、四万十川と蛸瀬川の個体間の系統の差もよりの確に把握できる。[平岡委員(当日は欠席)]
- ・移植後のモニタリング時には移植個体だけでなく、自生地の個体についてもコントロール(対照区)として併せて生育状況等を記録するとよい。また、自生個体の繁殖形態や生活史についても今後の事業の基礎情報となるため、調査しておくとうよい。[平岡委員(当日は欠席)]
- ・三河湾のアマモの例などから、コアマモの生育には栄養塩類も大きく関係しており重要であるため、モニタリング計画に栄養塩類調査を加えていただきたい。[木下委員]
- ・竹島川は、数年前まで繁茂していたコアマモが消失したネガティブな事例である。現在もコアマモが繁茂している蛸瀬川と比較することで問題点が見えてくる。なお、栄養塩類も比較していただきたい。[木下委員]
- ・水温塩分は底層だけでなく、表層から底層まで連続的に、可能であれば10cm毎に計測していただきたい。[木下委員]
- ・四万十川のコアマモのDNA分析は既に実施されている。DNA分析の結果、蛸瀬川や宮崎県沿岸のコアマモとの違いはなかったため、改めて分析を行う必要はない。[木下委員]
- ・四万十川と蛸瀬川は、地理的にも近いとため、過去の分析で違いがないのであれば、改めてDNA分析をする必要はない。[石川委員]

(6) 渡川流域学識者会議への報告について

- ・委員からの意見は特になかった。

以上